９章　アメリカニゼーションと革命

佐藤勘治

メキシコ北部国境地帯メヒカリのおける「メキシカニゼーション」

1　はじめに―「土地襲撃 el asalto a las tierras」

1937 年 1 月 27 日、土地分配を求めるメキシコ人労働者 400 人がメヒカリ市近郊の綿花農園を襲撃し占拠した。この農園は中国系移民による借地で、地主は米国系コロラド社であった。同社はメヒカリ盆地の全農地 40 万 ha のうち 67.5%にあたる 27 万 ha を所有していた。

カルネダス大統領は同年 3 月、コロラド社所有地の収用分配に着手する。この政策によって、同社の借地綿花農園を経営していた中国系や日系の移民の多くが借地権を失うことにになった。

メヒカリ市は、太平洋岸の都市ティフアナから国境線沿いに東へ 160 キロ、カリフォルニア半島の付け根に位置する国境の開拓都市である。「メキシコ」「カリフォルニア」から数文字ずつとって、米国人開発業者によって名付けられた。「メヒカリ」はスペイン語読みであるが、英語読みで「メキシカリ」とすることも不自然でない。

カルデナス大統領期にメヒカリ盆地で行われた土地の収用分配は、他の外国系大農園の収用分配や石油産業の国有化（1938 年）などとともに「メキシカニゼーション」政策の一環であった。

2　ふたつのカリフォルニア

米国カリフォルニア州から地続きのメキシコ・バハカリフォルニア州に入ると景観は一変する。気候に大差は無いのに別世界が広がっている。この様な差が国境線の存在に起因しているのは言うまでもない。

メキシコ北部国境地域

ティファナ（人口 120 万）19 世紀半ばに誕生した。しかし、1900 年の人口は 200 人ほどでありその発展は米国南西部開発の南下が国境線に達する 20 世紀を迎えてからだった。特に、米国での禁酒法の制定（1919 年）はティファナの性格を決定づけた。

米国人来訪者、20 世紀初頭では特に海軍軍人の期待に応えるべく、「メキシコ」的民芸品や料理、酒、賭け事、売春などである。

近年ではマキラドーラ（家電製品などの組み立てを行いアメリカに輸出する保税加工工業）地域としての性格も加わり、さらに米国側で低賃金労働者として働く住民および越境の機会をうかがう非合法移民の一時滞在地、麻薬の流入ルートとしての役割も果たしている。

米国カリフォルニア州とメキシコ北西部の国境都市はサンディエゴとティファナ、カレキシコとメヒカリの様に歴史的な相互関係の結果としてツインシティーを形成している。

メヒカリとカレキシコ

米側の町カレキシコは、人口 3 万人。一方メヒカリは 1950 年には人口 6 万人に過ぎなかったが、現在では、工業化の結果、急激に拡大し 100 万に迫る勢いである。メヒカリの成立を規定した農業は後退し、主要産業はマキラドーラに代わっている。

3　砂漠の開拓

砂漠地帯で農業が成立するには、水の確保が不可欠である。コロラド川[1]からメキシコ側に引かれた水路を伝わって水が到達したのは 1902 年のことである。水の到来でコロラド砂漠は豊かな農業地帯に変わっていった。メヒカリ盆地とインペリアル盆地は、同一資本による一体の開拓地として同時に誕生する。メヒカリの誕生をアメリカニゼーションと呼ぶ第一の理由である。

運河と鉄道

開発業者は、水路として、技術的問題から、コロラド川から北上する支流でメキシコ側に位置するアラモ川の川筋を利用することにした。「コロラド社」は、1902 年、米側開発企業により別会社としてメキシコシティーで登記されている。メキシコ政府は国境線沿いの土地の外国人および外国法人による取得を禁止していたからである。コロラド社とその関連企業は、以降 30 年にわたってメヒカリ盆地の農地をほぼ独占することになる。水資源の管理運営も、コロラド社の子会社によっておこなわれた。

農産物輸送のための鉄道建設も行われた。米国側ではユマ・メヒカリ間（サザンパシフィック鉄道）が 1906 年に開通した。1909 年にはメキシコ側の同区間を結ぶインターカリフォルニア鉄道が完成し米側とつながった。しかし、メキシコの他地域と結ぶ鉄道は存在しない。

メヒカリ盆地の人口は 1910 年 1400 人、21 年 1 万 5000 人、30 年には 3 万人になった。入植が 10 年代以降急速に進んだことがわかる。

綿花栽培

綿花がメヒカリ盆地の主な生産物になるのは、1909 年エジプト綿が米国側に導入されて成功した後、1912 年からである。メキシコ側の作付面積は 12 年度 12ha、13 年度 4,400ha、20 年代の最初のピーク時には 6 万 ha ほどになった。メヒカリ側では年を追うごとに綿花栽培に特化していく。26 年、メヒカリでは作付面積の約 78%が綿花栽培にあてられた。

メヒカリにおける綿花栽培への特化は米系資本の意向によるもので、アメリカニゼーションのメヒカリでの現出形態の一つである。

4　「小広州」メヒカリ

農地化の役割の多くを担ったのは東洋系移民であった。荒地を実際に整地しそこに水を引いたのである。コロラド社から借地していた 95 農園の内訳は中国系 56、日系 22、米系 8 であった。いったい何故、東洋系移民が開発の主役となったのだろうか。

メヒカリにおける東洋系移民労働者の導入

1910 年には、サンフランシスコに入港した 50 人の中国人移民労働者がカレキシコに鉄道で直接送られメヒカリに入った。この輸送方法はボンドと呼ばれ米国への中国人移民労働者の入国が認められていなかったための措置であった。14 年には、中国系借地人グループがコロラド社と借地契約をし、荒地を適地にした。これがきっかけでコロラド社は中国系移民との契約をすすんで行うようになった。1916 年はメヒカリ発展の画期となった。この年、第一次世界大戦（1914～18）の影響で綿花需要が増大しメヒカリの灌漑地も急速に拡大した。カレキシコ在住の日系移民・郷は、「支那

[1] 【COLORADO】アメリカ合衆国の西部、ロッキー山脈に発源し、南西に流れてカリフォルニア湾に注ぐ川。中流の峡谷はグランド・キャニオンとして知られる。長さ 2320km。

人は桑港玄関から大いばりで入っている。日系移民もメヒカリに入植するのを急ぐべし」と大使館に報告している。

19 年メヒカリでのメキシコ人は 1,000 人を越えず、中国系移民は 4,500 人のほかに 19 年中に 2,000 人が入る予定である。

日系移民は 19 年 600 人であった。31 年 843 人、最多期には 1,000 人を越えていた。

当時のメヒカリ市は中国系住民によって広東省の州都にちなんで「小広州」と呼ばれていた。

米国側インペリアル盆地との比較

テイラーによる 27 年インペリアル盆地現地調査によると、全人口 5 万 4、500 人中メキシコ人は 2 万人で三分の一期強である。盆地へのメキシコ人の導入は、労働力不足が深刻になる第一次世界大戦の時期である。その遅れた理由について、テイラーは「中国人のメヒカリ導入がインペリアル盆地へのメキシコ人の流入を遅らせた」と指摘している。

東洋系移民の存在は、メヒカリにおけるアメリカニゼーションの第二の特徴である。

5　メヒカリの「メキシカニゼーション」

綿花栽培の導入によりメヒカリが急速な拡大を開始したのは、メキシコ革命[2]が勃発(1910 年 9 月）し、ディアス大統領[3]が退陣した時期（11 年 5 月）である。メキシコ革命とメヒカリの開発は、平行して進むことになる。

メキシコ革命の大動乱期から 37 年エヒード創設まで、革命政権はメヒカリに対して決定的干渉を行うことはなかった。

革命の動乱が一段落するとともに、バハカリフォルニア北地区を管轄する連邦政府や形成されつつあったメヒカリ内部の諸勢力は、非メキシコ的要素（すなわちアメリカ的要素）を取り除こうとする。

農業労働者の「メキシカニゼーション」

中国系移民の排除がまず取り組まれた。しかし、圧倒的な労働力不足の解決のほうが優先された。中国系移民労働者の制限が本格化するのは 20 年代である。

ロドリゲス知事（1923～29 年）の時期、「メキシカニゼーション」という言葉が積極的に使われ始めた。彼は、当初全国的に反中国人運動を展開していたカジェス派に属しており、後に、マキシマートといわれるカジェス傀儡政権期の最後の大統領（1932～34 年）になった人物である。そしてティファナをサンディエゴ海軍地域向け娯楽地域にした人物である。

1924 年には、メキシコ人雇用者の比率を 50%以上求める条例が布告されるが、実効性はなかった。

だが、29 年恐慌によって事態は急変した。米国からメキシコ人が大量に帰国あるいは強制送還された 30 年代はじめ、恐慌の影響でメヒカリの綿花栽培も急激に縮小し、失業者があふれていた。29 年には、反中国人運動組織がメヒカリでも活動するようになり、排斥の動きは急速に強化されて

---

[2] 【メキシコ革命】1910 年、ディアス大統領の独裁に反対してマデロら自由主義者が蜂起したことに始まる革命。サパタやビリャにより急進化。政治の民主化や農地改革、労働者の地位向上、民族主義などを目指し、これらの主張は、17 年の憲法に集大成された。

[3] 【Porfirio Diaz】メキシコの政治家大統領（1876～1880・1884～1911）政治の安定と経済成長を目指したが、独裁の長期化と貧富の差の拡大によりメキシコ革命を引き起こし、失脚。（1830～1915）

いく。
30年には80%メキシコ人雇用が命じられ、経済状況が最悪となる32年、メキシコ人100%雇用が命じられるまでに至った。
バハカリフォルニアの中国系住民は30年3087人から40年618人に減っている。

土地所有の「メキシカニゼーション」

土地所有の「メキシカニゼーション」は冒頭で述べた1937年1月27日の「土地襲撃事件」を直接的な契機として達成されることになる。以後、40年代までにすべての米国系所有地が収用される。
東洋系借地農業者は、この一連の政策により綿花栽培における主要な生産者としての地位を失った。日系移民にも代替地が用意されるなどしたが、新たな開拓地を求めて満州に転身する決意を固めたものもいた。一方、中国系移民のほとんどはこの政策をきっかけに農業部門を離れ、メヒカリ市部で商業活動に移行したと言われている。

「メキシカニゼーション」とアメリカニゼーション

30年代一気に進むメヒカリにおける「メキシカニゼーション」政策は、アメリカニゼーションを克服したのだろうか。第一に指摘されなければならないのは、土地所有権は確かにメキシコ化されたものの、綿花栽培における生産過程特徴である米国資本による一元的支配に関しては「メキシカニゼーション」は実施されなかった点である。しかも、これこそが、アメリカニゼーションの本質的部分である。

6　残された「アメリカ」と住民意識におけるアメリカの位置

コロラド砂漠で開発が始められてから 10 年ほどの間、国境の南と北で大きな違いはなかった。しかし、双方で農業生産が軌道に乗ると、インペリアル盆地とメヒカリ盆地の間には徐々に差異が広がっていった。この差異がメヒカリにおけるアメリカニゼーションの過程であった。1920年代中頃から「メキシカニゼーション」が展開するものの、アメリカニゼーションの本質部分は残された。メヒカリにおける「メキシカニゼーション」は反アメリカニゼーションとなり得なかったと結論づけることができる。
開発の初期段階において、外見的には、メヒカリとカレキシコとの間に大きな差異がなかったとしても、ヘゲモニーはつねにカレキシコ側にあった。米系の事務所はコロラド社を除いてカレシキコ側におかれていた。
こうした意識上の問題を詳しく論じることができれば、国境線の両側には、人びとの意識の中に開発の初めから差異が存在していたということも可能であろう。

§　感想

筆者は2000年4月から2003年7月の3年余、マレーシアのテレビ・ビデオの設計会社シャープ・エレクトロニクス・マレーシア（SEM）社に赴任した。その間、4～5 回ティファナ（正確に言うと少し南のロサリト）にあるSEMEX社に出張した。当時、SEMはロサリトで生産される年間250万台のＴＶについては100%設計を担当していた。従って、半年に一度は現状の問題点解決や今後の設計方針の方向付けについて現地での打合せが必要であった。
その機会に同業他社（ソニー、松下、JVC，三洋、三星など）を訪問した。ソニーのテレビの組み立て工場はメヒカリにあり、2002年8月29日（木）に訪問している。筆者が第9章を選んだの

は「メヒカリ」という懐かしい地名があったからである。

9 章の内容と筆者が見たり聞いたりしたことに不思議と共通点がある様に思える。まず、第一にティファナの印象である。石川好が 211 ページで「・・大きな家、お湯の出る台所、高級車、・・・」とあるが、1 回目の出張時の印象は、ボーダーを越える前は、刈り込まれた綺麗な芝生や大小の木々に囲まれた美しい家、良く清掃された道路であった。しかし、一旦イミグレを通過すると草も生えない岩ばかりで、緑も少なく、街路は汚かった。丁度インドネシア（失礼な表現であるが。。。）に行った様なイメージであった。「天国から地獄へ」は正にこの様な光景を言うのだろうと驚いた。

現地の日本人駐在の人々は毎日サンジェゴからボーダーを通ってティファナ地区に通勤している。1 日 1 往復、天国と地獄の風景を見ながらの運転である。彼らの説明によると、「カリフォルニア政府は莫大な金を散水のために投下している。もし、この水が無ければ、サンジェゴは緑なしとなり、光景は地獄に近づいて行くだろう」と。

ソニー・メヒカリは 2,800 人のメキシコ従業員を使い 20～32 型のテレビを年間 310 万台生産していた。日本人は 10 人で社長以下の要職についている。テレビは 15 年前にティファナでメキシコ生産を開始したが、5 年前に全生産をメヒカリに移転してきている。マキラドーラの特典を生かし部品を無税で輸入し、完成したテレビ全量を無税でアメリカに輸出している。商品の設計は①普及機をティファナで、②高級機をサンジェゴ市内で行っている。技術者の数は①日本人 4 人、ローカル 30 人、②日本人 10 数人、ローカル 35 人である。部品の購買部門はサンジェゴ側にある。商品企画と営業部門は米国北部にあるので、マーケティングから、設計、生産、販売に至るまでの一気通貫のシステムを米国、メキシコ圏内で形成していると言える。

ソニー以外のテレビ生産について訪問結果を概観してみると下記の通りである。三星は韓国、それ以外は日系である。

シャープ：年間 250 万台の CTV を生産。部品の購買部門はサンジェゴ側のボーダーの所にあり。
松下　　：3044 人の社員で年間 220 万台の CTV と 20 万台のプロジェクション TV を生産。
JVC　　：2000 人の社員（内、日本人 20 人）で年間 200 万台の TV を生産。
三洋　　：年間 130 万台の TV 完成品とアーカンソー行きの TV シャーシー150 万台を生産。
三星　　：年間 260 万台のテレビと 500 万台のパソコン用モニターTV を生産。

以上のテレビ産業の内容を綿花栽培と対比してみると次の様になる。TV 産業の場所はソニーがメヒカリ、それ以外はティファナ地区である。

産業	資本	企業の中枢	出荷先	使用者	労働者
綿花栽培	米系	カレキシコ(資金、納入)	米国	中国・日本人	メキシコ人
TV 生産	日・韓国系	サンジェゴ(設計、購買)	米国	日本・韓国人	メキシコ人

第 9 章ではメヒカリにおいて米国資本の下に中国・日本人移民がメキシコ人を使い綿花の栽培を行っていたが、現在ではメヒカリ、ティファナにおいて日本・韓国系資本が、日本人（韓国人）社長の指揮の下、低賃金のメキシコ人労働者を使い、テレビを生産している。出荷先はアメリカで、企業の中枢部もアメリカ側にある。時代は変わろうとも大枠は良く似ていると考える。

以上